

指示理論における確定記述と 話し手の指示の意義

On the Significance of Definite Descriptions and Speaker's References
in the Theory of Reference

村 越 行 雄

要 旨

“Reference and Definite Descriptions” (1966) の中でドネランによって主張された確定記述における指示的使用と属性的使用の区別という考えは、それ以前のストローソンの “On Referring” (1950) の批判を通して、リンスキーの “Reference and Referents” (1963) を手掛かりとしながら浮かび上がったものであるが、またそれはそれ以後のクリプキの “Speaker's Reference and Semantic Reference” (1977) とサールの “Referential and Attributive” (1979) において批判対象となったものでもある。その意味から言うと、ドネランの主張を中心に、彼が批判対象としたストローソン、リンスキーの両主張そして彼を批判対象としたクリプキ、サールの両主張との比較検討を行なうことは、単にドネランの主張のみならず、ストローソン、リンスキー、クリプキ、サールのそれぞれの主張をも明確にさせる結果となり、また各主張の比較を言語行為論的・語用論的視点から検討することにより、それぞれの主張における確定記述と話し手の指示の関係をより一層明確にさせ、最終的にストローソン—リンスキー—ドネラン—クリプキ—サールの過程が話し手の指示に関する一つの歴史であることを浮き彫りにさせることにもつながるのである。

Key words : reference (指示), speaker's reference (話し手の指示), definite description (確定記述), Keith Donnellan (ドネラン), P. F. Strawson (ストローソン), Saul Kripke (クリプキ), John R. Searle (サール)

(I) はじめに

指示 (reference) に関する議論は、多岐にわたる諸問題を巻き込み、数多くの論争を生み出してきた。その一つに確定記述 (definite descriptions) に関するラッセル (Bertrand Russell, "On Denoting" (1905)⁽¹⁾) とストローソン (P. F. Strawson, "On Referring" (1950)⁽²⁾) の論争があり、その論争に関連して多くの研究者が様々な視点から検討を加えてきたが、その中において確定記述における指示的使用 (the referential use of a definite description) と属性的使用 (the attributive use of a definite description) の区別に基づいて、ラッセル、ストローソン両者それぞれに欠点があるとして批判し、両者を乗り越える新たな理論を確立しえると主張したのがドネラン (Keith Donnellan) の "Reference and Definite Descriptions" (1966)⁽³⁾ であった。彼の論文は、その正当性に関する評価は別にして、それ自体多くの研究者を巻き込む大論争を引き起こしたという点で、重要な位置を占めるものとしてあると言える。彼の主張、とくに確定記述における指示的使用と属性的使用の区別に関する正当性の評価をめぐる、肯定的立場あるいは否定的立場から様々な意見が出されてきたが、本稿では、言語行為論 (the theory of speech acts) 的視点から否定的立場を表明するサール (John R. Searle) の "Referential and Attributive" (1979)⁽⁴⁾ とクリプキ (Saul Kripke) の "Speaker's Reference and Semantic Reference" (1977)⁽⁵⁾ を扱うことにする。また、両者の立場をより鮮明にする為、ドネラン以前も併せて扱うことにする。

(II) 言語行為論的視点

本稿では、指示に関連して議論されてきた多くの重要な諸問題の内、あくまでもその一部分のみに焦点を合わせて検討を加えていくことになるが、そのことは決して他の諸問題が持つ意義と価値を否定することではないことをまず最初に明確にしておかなければならない。それは、簡単に言えば、言語行為論的視点あるいは語用論 (pragmatics) 的視点を中心にして検討することであり、意味論 (semantics) 的視点などは今回直接対象としないことである。

例えば、今回対象とするストローソンの "On Referring" (1950)、リンスキー (Leonard Linsky) の "Reference and Referents" (1963)⁽⁶⁾、ドネランの "Reference and Definite Descriptions" (1966)、"Speaker Reference, Descriptions and Anaphora" (1978)⁽⁷⁾、クリプキの "Speaker's Reference and Semantic Reference" (1977)、サールの "Referential and Attributive" (1979) 等の論文には言語行為論的・語用論的立場から指示の分析がなされているという点で共通性がある。指示に関して、話し手の指示 (speaker's reference) を前面に出すストローソン⁽⁸⁾、話し手の指示と行為としての指示を前面に出すリンスキー⁽⁹⁾、指示的使用と属性的使用の区別の基準を話し手の意図によるものとし ("Reference and Definite Descriptions")⁽¹⁰⁾、更にクリプキのように話し

手の指示と意味上の指示 (semantic reference) に区別し、話し手の指示の重要性を強調し、指示的使用と属性的使用の区別を話し手の指示、話し手の意図の有無によるものとする (“Speaker Reference, Descriptions and Anaphora”)¹¹⁾ドネラン、話し手の指示と意味上の指示の区別の必要性と重要性を主張し、ドネランが抱えている諸問題は言語行為論によって処理できるとするクリプキ¹²⁾、代表的な言語行為論者として言語行為としての指示を独自の視点から捉え、話し手の指示における新たな区別を提案し、ドネラン更にクリプキを批判するサール¹³⁾ という具合に。このように話し手の指示、言語行為としての指示、話し手の意図といった言語行為論的・語用論的視点を何らかの形で共有するという点で共通性を持っているが、彼らの捉え方、位置付けは勿論それぞれ異なるが、ある意味で、少なくともリンスキーがストローソンを、ドネランがストローソンとリンスキーを、クリプキがドネランを、サールがドネランとクリプキを批判しながら発展させていったという意味で、ストローソンからサールまでを歴史的発展という延長線上に位置するものとしてみることもできよう。

意味上の指示と話し手の指示の関係から言うと、話し手の指示に関しては、上記の研究者のみならず、現在でも多くの研究者によって、重要な位置を占めるものとして認められていると思われるが、意味上の指示に関しては、ストローソン、リンスキー、サールにおいて軽視あるいは無視されているとして批判し、最近その存在意義を強く主張する研究者がいることも事実である¹⁴⁾。ここでその問題を論ずることはできないが、ただ意味上の指示と話し手の指示は、明確に区別できるものであり、それぞれが持つ存在意義も認められることだけを述べておくことにする。ともかく、言語行為論的・語用論的視点からストローソンからサールまでを見ていくことにする。

(Ⅲ) ドネランのラッセルとストローソンに対する批判と自らの主張

ドネランの “Reference and Definite Descriptions” は、基本的には、確定記述に関するラッセルとストローソンの両理論に対する批判と確定記述における指示的使用と属性的使用の区別に対する正当性の主張から構成されている。そこでは、確定記述は明確に区別できる二つの機能として使用できるとし、しかもそうした確定記述を含む同一の文は、個々の異なる機会において、そのいずれの機能としても使用され得るとした上で、つまり確定記述には指示的使用と属性的使用とがあり、しかも同一の確定記述を含む同一の文は、個々の異なる使用場面において、指示的にも、あるいは属性的にも使用され得るとした上で、ラッセルとストローソンの両理論では、その点に関して具体的に触れられておらず、むしろ前者では、属性的使用のみが適用できるだけで、指示的使用はまったく無視されているのに対して、後者では、指示的使用の分析が行なわれているにもかかわらず、行き過ぎがあり、結局指示的使用と属性的使用が混同され、両使用の要素が指示的使用の中に取り入れられてしまっているとして批判し、その批判を通して、自らの確定記述に関する指示理論を展開しているのである。以上の意味から言うと、ラッセルとストローソン

の両理論それぞれの欠点を排除し、利点を取り入れながら、その上でドネランの理論が出来上がったとも言えよう。そして、ラッセルとストローソンの両理論に対する批判は、大別して、二つの点からなされている。その批判については、後で述べることにして、その前に確定記述における指示的使用と属性的使用の区別に関するドネランの主張を調べることにする。彼は言明 (statements) を中心に話しを進めているが、彼の主張の要点は次のようなものである。

(1) [両使用の特徴] I will call the two uses of definite descriptions I have in mind the attributive use and the referential use. A speaker who uses a definite description attributively in an assertion states something about whoever or whatever is the so-and-so. A speaker who uses a definite description referentially in an assertion, on the other hand, uses the description to enable his audience to pick out whom or what he is talking about and states something about that person or thing. In the first case the definite description might be said to occur essentially, for the speaker wishes to assert something about whatever or whoever fits that description; but in the referential use the definite description is merely one tool for doing a certain job—calling attention to a person or thing—and in general any other device for doing the same job, another description or a name, would do as well. In the attributive use the attribute of being the so-and-so is all important, while it is not in the referential use.⁶⁵

確定記述の属性的使用を a speaker who uses a definite description attributively states something about whoever or whatever fits that description. In this case the definite description might be said to occur essentially. と特徴づけ、それに対して、確定記述の指示的使用を a speaker who uses a definite description referentially uses the description to enable his audience to pick out whom or what he is talking about and states something about that person or thing. In this case the definite description is merely one tool for calling attention to a person or thing. と特徴づけた後で、確定記述 “Smith’s murderer” を含む例文 “Smith’s murderer is insane” を挙げて説明する。例えば、スミス氏の死体を見て、スミス氏の人柄のよさ、そのひどい殺され方から “Smith’s murderer is insane” という場合、スミス氏を殺した人がたとえ誰であれ（誰であるか知らなくても）、その人が正気でないことを述べているのであり、その確定記述は、属性的に使用されていることになる。また、ジョーンズ氏がスミス氏の殺人犯として法廷に出頭し、彼の法廷での奇妙な行動を見て “Smith’s murderer is insane” という場合、“Smith’s murderer” によって聞き手がジョーンズ氏であることを見出すことができるように意図して話し手は “Smith’s murderer” を使用し、そしてそのジョーンズ氏について（真犯人がジョーンズ氏であるかどうか、また別の人であるかどうかは別にして）彼が正気でないことを述べているのであり、その “Smith’s murderer” は聞き手の注意をジョーンズ氏に向けさせる為の単なる道具にすぎず、その確定記述は、指示的に使用されていることになる。このように、同一の文 “Smith’s murderer is insane”

の中にある同一の確定記述 “Smith’s murderer” が異なる使用場面によって属性的に使用されたり、指示的に使用されたりすることになる。

(2) [両使用区別の基準] In general, whether or not a definite description is used referentially or attributively is a function of the speaker’s intentions in a particular case. “The murderer of Smith” may be used either way in the sentence “The murderer of Smith is insane.” It does not appear plausible to account for this, either, as an ambiguity in the sentence. The grammatical structure of the sentence seems to me to be the same whether the description is used referentially or attributively: that is, it is not syntactically ambiguous. Nor does it seem at all attractive to suppose an ambiguity in the meaning of the words; it does not appear to be semantically ambiguous. (Perhaps we could say that the sentence is pragmatically ambiguous: the distinction between roles that the description plays is a function of the speaker’s intentions.) These, of course, are intentions; I do not have an argument for these conclusions.⁶⁶

個々の使用場面において、確定記述が指示的に使用されているのか、あるいは属性的に使用されているのかを判断する基準は、その確定記述を使用する話し手の意図によるものであるとしている。つまり、文 “The murderer of Smith is insane” に含まれている確定記述 “The murderer of Smith” がある時は指示的に、またある時は属性的に使用され得るという問題は、たとえ個々の異なる場面で使用されるとしても、同一の文が使用される以上、統語論的に見ても、あるいは意味論的に見ても同一のものであるから、結局個々の使用場面で異なる使用者側の意図を扱う語用論的な問題ということになる。

勿論、両使用を区別する基準が話し手の意図（言語行為論的・語用論的基準）であるとしても、話し手の意図が直接関係するのは、属性的使用ではなく、指示的使用であるが、その係わり方が曖昧であり、しかも確定記述の指示的使用における話し手の指示の役割が明確に示されておらず、指示における話し手の指示と意味上の指示の関係が曖昧な形のままで残されている。そうした点を解決し、両使用の区別の意義をさらに強調する意図で “Speaker Reference, Descriptions and Anaphora” が発表されたと言えるであろう。

(2') [話し手の指示・話し手の意図] People refer and expressions refer. Let us call these phenomena SPEAKER REFERENCE and SEMANTIC REFERENCE, respectively. What connection exists between the two? The question has importance for how we theorize about various referring expressions—demonstratives, for example. And it is fairly crucial for what significance should be attached to a distinction I proposed some time back (Donnellan 1966 and 1968) between what I called two uses of definite descriptions, the REFERENTIAL and the ATTRIBUTIVE.⁶⁷

The referential/attributional distinction and the presence or absence of speaker reference should

be thought of as based on such intentions of the speaker toward his audience or the lack of them—not on whether the speaker believes or does not believe about someone or something that he or it fits the description.¹⁸

Let us say that a definite description is uttered in a REFERENTIAL CONTEXT when speaker reference exists relative to it. So far, all this will mean is that the speaker intends to refer to something and intends his audience to recognize his reference in part through his having used that definite description. ... a definite description will be uttered in an attributive context when speaker reference relative to it is absent.¹⁹

“Speaker Reference, Descriptions and Anaphora”において、指示を話し手の指示 (we refer to something) と意味上の指示 (an expression refers to something) に区別し、とくに前者に焦点を合わせて、確定記述の指示的使用と属性的使用の区別は、話し手の指示が存在するかどうか、更に話し手の聞き手に対する意図が存在するかどうかによるとされている。つまり、話し手が確定記述を指示的に使用する際、そこには確定記述に関わる話し手の指示が存在し、しかも聞き手に指示対象とその指示対象に関する情報を認識させようとする話し手の意図が存在することになるが、属性的に使用する際は、そうした話し手の指示も話し手の意図も存在しないことになる。そして、個々の場面で一致したり、食い違ったりすることは認めながらも、根本的には話し手の指示と意味上の指示とを完全に分離したものであるとしているギーチ (Peter Geach) とクリプキを批判し、本来話し手の指示と意味上の指示とを完全に切り離すことはできず、むしろ話し手の指示が意味上の指示を決定する関係にあるとしている。

(3) [話し手の前提] In both situations [the attributive use and the referential use], in using the definite description “Smith’s murderer,” the speaker in some sense presupposes or implies that there is a murderer.²⁰

when a definite description is used referentially, not only is there in some sense a presupposition or implication that someone or something fits the description, as there is also in the attributive use, but there is a quite different presupposition; the speaker presupposes of some *particular* someone or something that he or it fits the description.... No such presupposition is present in the attributive use of definite descriptions. There is, of course, the presupposition that someone *or other* did the murder, but the speaker does not presuppose of someone in particular—Jones or Robinson, say—that he did it.²¹

確定記述を使用する際に話し手が前提とするものは、属性的に使用する際と指示的に使用する際とは異なり、前者における話し手による前提とは、the presupposition that someone or something fits the description のことであり、後者における話し手による前提とは、the presupposition that someone or something fits the description に加えて、the presupposition that someone in

particular or something in particular fits the description のことであるとしている。前掲の例を使用して言えば、確定記述 “Smith’s murderer” を属性的に使用する場合，“Smith’s murderer is insane” と言う時、話し手はたとえ誰であれ、誰かがスミス氏を殺したこと、つまりたとえ誰であれ、殺人者が存在していることを前提としているだけで十分であるが、指示的に使用する場合、話し手はそれだけでは十分ではなく、ジョーンズ氏という特定の人がスミス氏を殺したこと、つまり殺人を犯したジョーンズ氏が存在していることまで前提としていることになる。

(4) [誤りの前提] considering the consequences of the assumption that Smith had no murderer (for example, he in fact committed suicide). In both [attributive use, referential use] situations, in using the definite description “Smith’s murderer,” the speaker in some sense presupposes or implies that there is a murderer. But when we hypothesize that the presupposition or implication is false, there are different results for the two uses. In both cases we have used the predicate “is insane,” but in the first [attributive] case, if there is no murderer, there is no person of whom it could be correctly said that we attributed insanity to him. Such a person could be identified (correctly) only in case someone fitted the description used. But in the second [referential] case, where the definite description is simply a means of identifying the person we want to talk about, it is quite possible for the correct identification to be made even though no one fits the description we used. We were speaking about Jones even though he is not in fact Smith’s murderer and, in the circumstances imagined, it was his behavior we were commenting upon.

It is, moreover, perfectly for our audience to know to whom we refer, in the second situation, even though they do not share our presupposition. A person hearing our comment in the context imagined might know we are talking about Jones even though he does not think Jones guilty.

Generalizing from this case, we can say, I think, that there are two uses of sentences of the form, “The ϕ is ψ .” In the first, if nothing is the ϕ then nothing has been said to be ψ . In the second, the fact that nothing is the ϕ does not have this consequence.²²

(3)で述べた前提が誤りである場合、確定記述を属性的に使用する時と指示的に使用する時とは、異なる結果をもたらすことになる。前掲の文 “Smith’s murderer is insane” (確定記述 “Smith’s murderer” と述部 “is insane” から成る) を使用して言えば、もしスミス氏が殺されたのではなく、自殺したのであるならば、属性的使用の場合、誰かがスミス氏を殺したという話し手による前提が誤りとなる為、その人のことを正気でないと言っても、正気でないと言うべき相手がいないのであるから、結局真実のことは何も言っていないことになる。そこでは、たとえ誰であれ、誰かがスミス氏を殺したというその誰かが存在しなければ、正気でないことを述べる相手がいないことになり、何も言っていないことになってしまう。ところが、指示的使用の場合、ジョーンズ氏という特定の人がスミス氏を殺したという話し手による前提は誤りとなるが、属性

的使用の場合とは異なる目的があり、聞き手の注意をその特定の人に向けさせ、その人が話し手の指示している人であることを確認させることが話し手の意図であり、その上で彼（ジョーンズ氏）が正気でないことを述べる訳であるから、ジョーンズ氏が殺人犯でなくても、聞き手はジョーンズ氏が話し手の指示している人であることを確認でき、そのジョーンズ氏が正気でないことを理解するのである。つまり、話し手の意図する指示対象の人であるジョーンズ氏と話し手の使用する確定記述は食い違いが、話し手の目的は達成されたことになる。勿論、話し手と聞き手が法廷で見ている人が、例えばジョーンズ氏ではなく、別の人であったり、名前が分からなくても、同じである。というのは、話し手の意図は、法廷で見ている人に聞き手の注意を向けさせ、その人を確認させることであり、その上で正気でないことを言うのであるからである。このように、前提が誤りであっても、属性的使用の場合、話し手は何も真実のことを言っていない、正気でないことすら言っていないことになってしまうが、指示的使用の場合、話し手の目的は達成され、彼の言っていることは真実となる（“Smith’s murderer is insane” という話し手の目的は “Jones is insane” を聞き手に伝えることであるから）という具合に、両使用では異なる結果をもたらすことになる。

(5) [指示的使用における誤りの前提] Linsky in which he rightly makes the point that one can refer to someone although the definite description used does not correctly describe the person... [リンスキーの例文 “Her husband is kind to her”]

There is much that is right in this [Linsky’s] passage. But because Linsky does not make the distinction between the referential and the attributive uses of definite descriptions, it does not represent a wholly adequate account of the situation.²³

I agree with Linsky in holding that a speaker may refer even though the “presupposition of existence” is not satisfied. And I agree in thinking this an objection to Strawson’s view.... I find myself in agreement with much of Linsky’s article.²⁴

My main point, here, however, has to do with Linsky’s view that because the presupposition is not satisfied, the *statement* is neither true nor false.²⁵

he [Linsky] claimed that, were someone to say “Her husband is kind to her,” when she has no husband, *the statement* would be neither true nor false. As I have said, this is a likely view to hold if the definite description is being used attributively. But if it is being used referentially it is not clear what is meant by “the statement.” If we think about what the speaker said about the person he referred to, then there is no reason to suppose he has not said something true or false about him, even though he is not the lady’s husband. And Linsky’s claim would be wrong....

I am thus drawn to the conclusion that when a speaker uses a definite description referentially he may have stated something true or false even if nothing fits the description, and that there

is not a clear sense in which he has made a statement which is neither true nor false.²⁰

(4)で述べたことを更に明確にする為、リンスキーの検討が行なわれる。リンスキーの主張に一面では同意しながらも、また一面では反対するのであるが、それは、話し手による前提が誤りの場合（話し手が指示する対象の人・物を正確に記述していないこと、話し手の使用する確定記述に合う人・物が存在していないこと）、それでも話し手は指示対象の人・物を指示していることになるという点では、同意できるが、それによって話し手の言ったことが真でもなければ、偽でもないとする点で、反対するという点である。そこには二つの問題がある。つまり、前提が誤りの場合、果たして話し手は指示していると言えるのかどうかという問題、そして話し手の言明(statement)は真偽のいずれなのか、それともいずれでもないのかという問題である。このことについては、後でストローソンとリンスキーとの関係で述べることにする。

リンスキーの主張の矛盾は、確定記述の指示的使用と属性的使用の区別ができなかったことによるものとして、リンスキーの例文“Her husband is kind to her”を使用して説明するのであるが、分かり易くする為、ここでは前掲の例文を再び使用することにする。話し手が“Smith’s murderer is insane”と言う時、指示的使用の場合、スミス氏が自殺したのであっても、“Smith’s murderer”を使用して話し手が意図する指示対象のジョーンズ氏を指示していると言える訳で、その点ではリンスキーに同意できるが、話し手の言明(“Smith’s murderer is insane”)が真偽いずれでもないとは言えず、その点で同意できず、むしろジョーンズ氏について真実のことを言っているのである。ところが、属性的使用の場合、自殺であれば、殺人者(たとえ誰であれ)そのものが存在しないことになる為、何も真実のことを言っていないことになり、その意味で、話し手の言明は真偽いずれでもないのとれないこともない。ということは、本来指示的使用を扱っているはずのリンスキーは、一方では指示的使用の特徴を受け入れ、また一方では属性的使用の特徴を受け入れることになり、そこに矛盾が生まれてきたとしている。

結局、話し手が確定記述を指示的に使用する場合、前提が誤りであっても、話し手の指示そのものは可能であり、また話し手の意図する指示対象の特定の人・物について真偽いずれかのことを言っていることも確かであるという結論に達するのである。

以上、(1)―(5)においてドネランの主張を要約してきたが、(1)―(2′)の確定記述における指示的使用と属性的使用の区別と(3)―(5)の両使用区別に基づく前提・誤りの前提の相違という二点は、またクリプキ、サール等が批判対象とする問題点でもある。

(IV) ドネランのストローソンとリンスキーに対する批判

(Ⅲ)の冒頭で触れたように、ラッセルとストローソンの両理論に対してドネランが批判する二つの問題点を調べることにする。第一の問題点は、文の実際の使用場面から切り離れた形で、文の中に含まれる確定記述を論じえるかということである。そして、第二の問題点は、前提が誤り

の場合、話し手の言明の真偽にどのように影響するかということである。勿論、ドネランの批判は、前述の指示的使用と属性的使用の区別と前提に関する自らの見解に基づくもので、そうした視点がラッセルとストローソンの両理論に見出せないことに対するものである。

第一の問題点に関して、文の使用場面を直接対象としないラッセルは勿論のこと、その使用場面を本来の対象としているストローソンまでも批判するのである。ストローソンは次のように述べている。

you use the expression to *mention* or *refer to* a particular person in the course of using the sentence to talk about him.... ‘Mentioning’, ‘referring’, is not something an expression does ; it is something that someone can use an expression to do. Mentioning, or referring to, something is a characteristic of *a use* of an expression, just as ‘being about’ something, and truth-or-falsity, are characteristics of *a use* of a sentence.²⁷⁾

the expression itself does not refer to anything ; though it can be used, on different occasion, to refer to innumerable things.²⁸⁾

彼の言葉から明らかなように、表現自体が何かを指示することはなく、あくまでも話し手がある表現を使用して、特定の人・物を指示するのであり、話し手の指示は、使用の問題であるとしているのである。ところが、ドネランは、上記の内、“‘Mentioning’, ‘referring’, is not something an expression does ; it is something that someone can use an expression to do” を引用して、そのことは “definite descriptions cannot be identified as referring expressions in a sentence unless the sentence is being used”²⁹⁾ を必ずしも伴うことはないとしている。更に、

the more particular presuppositions that we find present in referential uses are clearly not ones we can assign to a definite description in some particular sentence in isolation from a context of use. In order to know that a person presupposes that Jones is Smith’s murderer in using the sentence “Smith’s murderer is insane,” we have to know that he is using the description referentially and also to whom he is referring. The sentence by itself does not tell us any of this.³⁰⁾

と言う。結局のところ、話し手がある表現あるいは確定記述を使用して、ある特定の人・物を指示するという点（指示的使用の場合、話し手の指示と特定の人・物の指示という要素が存在すること）では、両者は一致していると言えるが、両者の食い違いは、指示的使用と属性的使用の内、前者のみを認めるのか、それとも両方を認めるのかによると言えよう。例えば、文 “Smith’s murderer is insane” を使用して言えば、“Smith’s murderer”（ストローソンによれば、それ自体で指示的表現（a referring expression）になるが、ドネランによれば、指示的にも、属性的にも使用しえる確定記述なのである）がいかなる使用場面においても必ず指示的に使用されるのであれば、実際に使用されるか、されないかに関係なしに、“Smith’s murderer” が指示的に使用されることは分かるのであるが、“Smith’s murderer” が実際の個々の使用場面で指示的にも、あ

るいは属性的にも使用されうるのであれば、実際の個々の使用場面を考慮に入れて初めて、どちらか判断できることになる。そうした理由で、ストローソンがいくら指示を使用の問題であると強調しても、それで実際の使用場面を考慮して指示を論じているということにはならず、結局彼の意図は別にして、実際の使用場面を切り離れた形で、確定記述の指示的使用を論じているとしてドネランはストローソン批判を行なうのであると考えられよう。その意味で、ドネランは確定記述が指示的に使用されているかどうかを知り、それから話し手が指示する特定の人・物を知らなければならないとしているのであろう。もしそうであれば、ドネランの主張も理解できるが、しかし、それ以前に彼の言う指示的使用と属性的使用（指示は存在しない）の区別に正当性があるのかどうか問題であり、もし全てが指示的に使用されるのであれば（事実、サールによれば、ドネランの言う属性的使用にも指示は存在することになる）、ストローソンの主張は正しいものになるであろう。

より重要と思われるのが第二の問題点である。ここでは、とくにストローソン、リンスキーそしてドネランの主張を比較検討するが、その前にラッセルとストローソンの主張を簡単に見ることにする。

now consider 'the King of France is bald'. By parity of form, this also ought to be about the denotation of the phrase 'the King of France'. But this phrase...has certainly no denotation, at least in any obvious sense. Hence one would suppose that 'the King of France is bald' ought to be nonsense; but it is not nonsense, since it is plainly false.⁶⁰

ラッセル（ラッセルの“On Denoting”，そしてストローソンの“On Referring”という論文の題名が示すように、ラッセルが denote を使用するのに対して、ストローソンは refer to を使用し、そこには本来表現自体が指示することを表す denote (an expression denotes something) と話し手が指示することを表す refer to (we refer to something) とでは大きな違いがあることを示しているのであるが、ここではそのことには触れないことにする。また、フレーゲ (Gottlob Frege), 更にストローソンによって明示された前提という概念⁶²は、ラッセルには見出せないのであるが、その点に関しても触れないことにする。) よれば、“The King of France is bald” は、もし there is no king of France であれば、偽であるということになる。ところが、ストローソンは

To say 'The king of France is wise' is, in some sense of 'imply', to *imply* [presuppose] that there is a king of France...this comes out from the fact that when, in response to his statement, we say (as we should) 'There is no king of France', we should certainly *not* say we were *contradicting* the statement that the king of France is wise. We are certainly not saying that it is false. We are, rather, giving a reason for saying that the question of whether it is true or false simply does not arise.⁶³

the question of whether his statement was true or false simply *did not arise*, because there

was no such person as the king of France.³⁴

So when we utter the sentence without in fact mentioning anybody by the use of the phrase, 'The king of France', the sentence does not cease to be significant: we simply *fail* to say anything true or false because we simply fail to mention [refer to] anybody by this particular use of that perfectly significant phrase.³⁵

と言う。“The king of France is wise”と話し手が言う時、there is a king of France を前提にしている訳で、もし there is no king of France であれば、その言明が真であるか、偽であるかという問題自体が起きないことになる。というのは、それ自体意味のある句 “the king of France” をある特定の場面で使用することによって誰も指示することができないという理由で、真偽いずれのことも何一つ言えないことになるからである。結局、前提となるフランス王の存在という条件が満たされず、誤りである場合、ラッセルによれば、話し手の言明が偽となり、それに対して、ストローソンによれば、指示そのものが不可能になるという理由で、話し手の言明は真偽いずれでもないことになる (neither true nor false)。

そこで、ストローソンの主張に関して言えば、二つの点が重要となる。つまり、前提が誤りの場合、指示そのものが不可能になるのかどうかという問題、そして言明が真偽いずれでもないのかどうかという問題である。これらの問題点に対して、リンスキーとドネランがそれぞれの立場から批判していくのである。

リンスキーによれば、

Strawson has argued correctly that if I claim, e.g., 'The king of France is Charles de Gaulle', what I have said is neither true nor false. The reason for this is not, as he says, that I have failed to refer in saying, 'The king of France...' The reason is that France is not a monarchy and there is no king of France. Just so, and said of a spinster, 'Her husband is kind to her' is neither true nor false. But a speaker might very well be referring to someone in using these words, for he may think that someone is the husband of the lady (who in fact is a spinster). Still, the statement is neither true nor false, for it presupposes that the lady has a husband, which she has not. This last refutes Strawson's thesis that if the presupposition of existence is not satisfied the speaker has failed to refer. For here that presupposition is false, but still the speaker has referred to someone, namely, the man mistakenly taken to be her husband.³⁶

ということになる。リンスキーは例文 “Her husband is kind to her” を使用して、話し手が未婚女性に対して “Her husband is kind to her” と言う時、彼女には夫がないので、話し手の言明は真でもなければ、偽でもなく、その点ではストローソンに賛成するが、それでも話し手は彼女の夫と勘違いした人を指示していることには変わりなく、その点でストローソンに反論を加えていくのである。そして、ドネランは、Ⅲ-5 で述べたように、リンスキーを直接の批判対象

としながら、確定記述の指示的使用に関して言えば、“Smith’s murderer is insane”の中の“Smith’s murderer”によって、たとえ自殺であっても、ジョーンズ氏という特定の人を指示していることになり、しかもその言明も真なのであるとしている。このように、ストローソンを一面では批判しながらも、一面では同意しているリンスキーを更に批判するドネランは、最終的には、ストローソンを全面的に否定する結果になるように思えるが、必ずしもそうではないのである。

そこで、ストローソン、リンスキーそしてドネランを比較して、その相違を見ると、“On Referring” (1950), “Reference and Referents” (1963), “Reference and Definite Descriptions” (1966)の年代を見て分かるように、一つの発展過程とみることができ、それぞれが持つ時代的制約を乗り越えながら、弱点・欠点を取り除き、長所・利点を更に伸ばして、修正し発展した結果がドネランであり、それはまたクリプキ、サール等によって批判される運命にあると言える。その移行過程を見ると、徐々に発展してきた跡が浮かび上がる。例えば、表現自体が指示することはなく、あくまでも話し手が特定の人・物を指示するとするストローソン、基本的にはそれを受け継ぎながら、派生的な意味で、表現自体が指示することを認めるリンスキー (Of first importance... is the consideration that it is the users of language who refer and make references and not, except in a derivative sense, the expressions which they use in so doing.⁸⁷⁾), 話し手が指示する話し手の指示と同様に、表現自体が指示する意味上の指示の存在も認め、更に話し手の指示の重要性を強調する意味で、確定記述の指示的使用と属性的使用の区別を行ない、指示をより詳しく規定するドネラン (前提が誤りの場合、指示自体が不可能で、言明が真偽いずれでもないとするストローソン、指示は可能であるが、言明は真偽いずれでもないとするリンスキーにドネランの言う属性的使用と類似した要素が見られ、それらを指示的使用から取り除き、指示的使用と属性的使用という形で区別したと見ることができよう) という具合に。また、真偽の価値判断に関しては、指示を使用の問題であるとし、使用の際の話し手による前提の存在意義を認め、従って文ではなく、言明 (話し手による文の発話) に対して真偽の価値判断を行なうという点で、三者は共通しているが、前提の真偽との関係で、前提が真であるときは、三者とも言明は真偽いずれかになるのに対して、前提が偽の時、言明が真偽いずれでもないとするストローソンとリンスキー、真偽いずれかであるとするドネランという具合に。別の言い方をすれば、ストローソンにとっては、指示が可能であれば (前提が真の時)、言明は真偽いずれかになるが、指示が不可能であれば (前提が偽の時)、真偽いずれでもなくなり、リンスキーにとっては、指示が可能であっても (前提が偽の時)、言明は真偽いずれでもなくなり、ドネランにとっては、指示が可能であるから (前提が真偽いずれでも)、言明は真偽いずれかになるという具合に考えると、リンスキーは過渡的段階に在ると言えよう。というのは、ストローソンにとっては、前提が真であれば、指示が可能となり、従って言明は真偽いずれかになるが、前提が偽であれば、指示が不可能になり、従って言明は真偽いずれでもなくなり、またドネランにとっては、前提が真偽いずれでも、指示

は可能で、従って言明は真偽いずれかになるということから考えると、ある意味で（前提と指示の関係の捉え方は異なるが、少なくとも指示が可能であれば、真偽いずれかになるという意味で）、両者には一貫性があると言えるが、それに対して、リンスキーにとっては、前提が真である時は、勿論指示が可能で、言明は真偽いずれかになるが、ところが前提が偽の時も、指示が可能であるとしながら、言明は真偽いずれでもないということになってしまうからである。

以上をまとめて簡単に言うと、次のようになる。ストローソンの主張には、三つの命題が含まれている。

- (A)もし前提が偽であれば、指示自体が不可能となる。
- (B)指示自体が不可能であるという理由で、言明は真偽いずれでもなくなる。
- (C)もし前提が偽であれば、言明は真偽いずれでもなくなる。

逆に言えば、

- (D)もし前提が真であれば、指示は可能となる。
- (E)指示が可能であるという理由で、言明は真偽いずれかになる。
- (F)もし前提が真であれば、言明は真偽いずれかになる。

となる。そして、もし(A)であれば、(B)がある為、(C)になる（別の言い方をすれば、もし(D)であれば、(E)がある為、(F)になる）とするストローソンの主張には、前提と指示の関係（前提が真であれば、指示は可能となり、前提が偽であれば、指示は不可能となるという関係）、指示と言明の関係（指示が可能であれば、言明は真偽いずれかになり、指示が不可能であれば、言明は真偽いずれでもなくなるという関係）、そして前提と言明の関係（前提が真であれば、言明は真偽いずれかになり、前提が偽であれば、言明は真偽いずれでもなくなるという関係）がはっきりと読み取れる。ところが、リンスキーの主張では、(A)を否定しながら、(C)を肯定する訳で、そのことは結局(B)をも否定することを意味し、もし(D)、(E)、(F)を受け入れるのであれば、明らかに(E)との矛盾が存在することを示すことになってしまう。この矛盾を避ける為に、言明の真偽と指示の有無にかかわらず、前提の真偽によるものであるとすると、指示の存在意義が失われてしまうことになってしまう。いずれにせよ、彼の主張は、矛盾が存在するという意味で、ストローソンからドネランへの移行における過渡的段階にあると言える。そうした矛盾を避けるには、(D)、(E)、(F)を受け入れるとした場合、(A)と(C)を否定し、(B)を、裏を返せば、(E)を肯定することにより、指示自体の有無によって言明の真偽を決めるとするしかないであろう。これがドネランの試みたことであろう。そうであるとすれば、ストローソンとドネランの主張には、彼ら自身の言葉によると、前提が偽である場合を論じている為、指示が不可能であるから、言明は真偽いずれでもないという言い方と指示が可能であるから、言明は真偽いずれかになるという言い方の相違はあるが、その意味するところは、指示の有無によって言明の真偽が判断されるということ（(D)、(F)のみならず、(B)と(E)も肯定するという点で、両者は一致していると言えるであろうし、ただ(A)と(C)を肯定

するか、否定するかだけが、つまり前提と指示の関係の捉え方が相違することになる）で、そこに共通点が見出せるのである。そして、矛盾が存在するとは言え、前提が偽である場合も、指示は可能であることを指摘したリンスキーの意義は、大いに評価されるべきものである。このように考えていくと、指示と言明の関係に対するストローソンの視点を存続させる一方で、前提と指示の関係に対するリンスキーの指摘を受け入れ、その上で前提と指示と言明の関係を見直したのがドネランであると言っても構わないであろうし、その意味で、そこにストローソンからリンスキーを通して発展した成果を見ることができると言えよう。ここで注意すべきことは、勿論指示に限定して検討しているのであり、しかも言明の中の指示的表現（ストローソン）、指示的に使用される確定記述（ドネラン）以外の要素を真であるという前提の下で、言明の真偽を検討していることである。

前提と指示の関係に対する三者の相違は、どのように判断すべきなのであろうか。リンスキー・ドネラン的捉え方は、広く受け入れられているが、果たしてストローソンの捉え方は、どのようなのであろうか。彼らの相違を生み出す原因の一つとして、どのような例文が使用されているかが考えられよう。ストローソンの例文 “The king of France is wise”, リンスキーの例文 “Her husband is kind to her”, ドネランの例文 “Smith’s murderer is insane” を比較して分かることは、まず、話し手が指示する特定の人物とそのために使用される確定記述が一致するものと信じて話し手が “The king of France”, “Her husband”, “Smith’s murderer” という確定記述を使用して、その特定人物について “The king of France is wise”, “Her husband is kind to her”, “Smith’s murderer is insane” と言う訳で、そこではフランス王が存在すること、彼女に夫がいること、スミス氏が殺されたことが前提とされているということである。ところが、リンスキーとドネランの例文では、話し手と聞き手がある特定の人物を実際に見て、その特定の人物について “Her husband is kind to her”, “Smith’s murderer is insane” と話し手が聞き手に言う訳で、確定記述 “Her husband”, “Smith’s murderer” を使用して話し手が指示する特定の人物は、たとえ彼女に夫がいなくても、スミス氏が自殺したのであっても（確定記述との食い違いが起きても）、現実に存在するのであるが、それに対して、ストローソンの例文では、現在フランスは君主政治を行っていない訳で、従って話し手が指示するフランス王は、現実には存在していない（例えば、仮装舞踏会でフランス王の仮装をしている人を指して、 “The king of France is wise” と言うのであれば、状況は変わる）ことになる。ということは、リンスキーとドネランの例文では、話し手が指示する特定の人物と確定記述の間に食い違いが存在し、その確定記述 (“Her husband”, “Smith’s murderer”) は話し手の指示対象である特定の人物（ジョーンズ氏など）を正確に表していないが、話し手の指示対象である特定の人物は、前提が偽であっても、現実に存在する訳で、従って話し手の指示は可能となるが、ストローソンの例文では、話し手が指示する特定の人物と確定記述は一致し、その確定記述 (“The king of France”) は話し手の指示対象である

特定の人物（フランス王）を正確に表している為、もし前提が偽であれば、話し手が指示する特定の人物が存在していないことになり、話し手の指示そのものが不可能になってしまうのである。以上の如く、三者の例文の相違は、話し手の指示対象である特定の人物とそのため使用される確定記述が一致するか、食い違いかによって、更に話し手の使用する確定記述を満足させる特定の人物が現実に存在する人物を指しているのかどうか、話し手が指示する特定の人物が現実に存在する人物を指しているのかどうかによって説明され得ると言え、そのことが前提と指示の関係に対する捉え方の相違を生み出していると言えるのである。従って、どちらがより妥当性があるかの問題より、それらを認め、その上でどう説明していくかが重要な問題となろう。

では、ストローソンの例文は、もしドネランであれば、どのように処理され得ると考えられるのであろうか。前述のストローソンの三命題(A), (B), (C), 話し手の指示対象である特定の人物と確定記述の一致などからすでに気が付くであろうが、ドネランの確定記述の属性的使用の場合と類似しているのである（属性的使用の場合、勿論特定の人物の指示は存在せず、また指示自体が全く存在しないのであるが）。スミス氏の殺人犯と思われる特定の人物を実際に見るのではなく、あくまでもスミス氏の死体を見て、話し手が聞き手に“Smith's murderer is insane”と言う時、殺人者が一体誰であるのか特定化できない為、“Smith's murderer”以外に言いようがなく（指示的使用の場合、話し手が意図する指示対象である“Jones”と言い換えることはできる）、従って話し手が指示対象とする Smith's murderer と確定記述の“Smith's murderer”が一致すると言えるであろうし、またそうであるとすれば、もし前提が偽であれば、指示自体が不可能になり、指示が不可能であれば、言明が真偽いずれでもなくなり、従って前提が偽であれば、言明は真偽いずれでもなくなるとした三命題(A), (B), (C)に一致すると言えるであろう。但し、ドネランの属性的使用の定義に従えば、指示という言葉（指示とは、特定の人・物の指示のことである）は使用できないのであるが、敢えて使用して言えば、以上の如く、ストローソンの捉え方とドネランの属性的使用とは、類似性を持っていると考えられるであろう。

分類型：(1)話し手と聞き手が指示対象の特定の人物を実際に見ておらず、話し手の使用する確定記述を満足させる特定の人物が彼らの目の前には存在していない場合、

(i)話し手の指示対象である特定の人物と確定記述が一致する場合 (Smith's murderer = “Smith's murderer”), (a)もし前提が真であれば、指示は可能であり、(b)しかも指示が可能であれば、言明は真偽いずれかになり、(c)それ故、もし前提が真であれば、言明は真偽いずれかになる。

(ii)話し手の指示対象である特定の人物と確定記述が食い違う場合 (Smith's murderer ≠ “Smith's murderer”), (d)もし前提が偽であれば、指示自体が不可能になり、(e)しかも指示が不可能であれば、言明は真偽いずれでもなくなり、(f)それ故、もし前提が偽であれば、言明は真偽いずれでもなくなる。

(2)話し手と聞き手が指示対象の特定の人物を実際に見ており、話し手の使用する確定記述を満足

させる特定の人物が彼らの目の前に存在している場合、

(i)話し手の指示対象である特定の人物と確定記述が一致する場合 (Jones = “Smith’s murderer”),
(a)もし前提が真であれば、指示は可能であり、(b)しかも指示が可能であれば、言明は真偽いずれかになり、(c)それ故、もし前提が真であれば、言明は真偽いずれかになる。

(iii)話し手の指示対象である特定の人物と確定記述が食い違う場合 (Jones ≠ “Smith’s murderer”),
(d)前提が偽であっても、指示は可能であり、(e)しかも指示が可能であれば、言明は真偽いずれかになり、(f)それ故、前提が偽であっても、言明は真偽いずれかになる。

以上の確定記述の指示的使用の分類型に基づいて言えば、リンスキーとドネランの例文は、直接には(2-ii)に属するが、当然前提が真の場合、(2-i)にも属する訳であるから、結局(2)に属することになり、それに対して、ストローソンの例文は、直接には(1-ii)に属するが、同様に前提が真の場合、(1-i)にも属する訳であるから、結局(1)に属することになる。このように、三者の例文は、それぞれ(1)あるいは(2)に属する訳で、いずれにより妥当性があるかという問題自体問われるべきではなく、むしろ(1)と(2)それぞれの存在を認め、その相違に注目すべきであろう。逆の言い方をすれば、ストローソンの主張には、(2)が欠けており、リンスキーの主張には、(1)と(2)の混同があり、ドネランの確定記述の指示的使用の説明には、(2)が中心で、(1)の意義は無視され、属性的使用に(1-ii)と類似した形が取り入れられているということになるのである。

(V) ドネランに対するクリプキとサールの批判

ドネランの確定記述における指示的使用と属性的使用の区別に関して、その区別の意義を認めながらも、別の視点から批判を加えていくのがクリプキとサールである。いずれにせよ、何らかの形で区別が存在することは、三者とも認めるところである。では、どのような形で区別するのであろうか、また何を基準にして区別するのであろうか。まず最初に言えることは、クリプキ、サール共に言語行為論的・語用論的視点から、話し手の意味 (speaker meaning) と文の意味 (sentence meaning) の区別に基づいて、考察していく点で一致していることである。

“Speaker’s Reference and Semantic Reference” (1977) において、クリプキは、グライスに従い、話し手の意味と言葉の意味を区別し、後者を基本的には意味論的に決められるとし、前者を基本的には話し手の意図によって決められるとした上で、例えば、泥棒が仲間に “The cops are around the corner” と言う時、その言葉の意味は、 “The police were around the corner” であり、話し手の意味は、 “We can’t wait around collecting any more loot: Let’s split!” となるという例を挙げてから、次のように言う。

Let us now speak of speaker’s reference and semantic reference: these notions are special cases of the Gricean notions discussed above. If a speaker has a designator in his idiolect, certain conventions of his idiolect (given various facts about the world) determine the referent in the

idiolect: that I call the semantic referent of the designator. (If the designator is ambiguous, or contains indexicals, demonstratives, or the like, we must speak of the semantic referent on a given occasion. The referent will be determined by the conventions of the language plus the speaker's intentions and various contextual features.) Speaker's reference is a more difficult notion. Consider, for example, the following case... Two people see Smith in the distance and mistake him for Jones. They have a brief colloquy: "What is Jones doing?" "Raking the leaves." "Jones," in the common language of the both, is a name of Jones; it *never* name Smith. Yet, in some sense, on this occasion, clearly both participants in the dialogue have referred to Smith, and the second participant has said something true about the man he referred to if and only if Smith was raking the leaves (whether or not Jones was). How can we account for this? Suppose a speaker takes it that a certain object *a* fulfills the conditions for being the semantic referent of a designator, "*d*." Then, wishing to say something about *a*, he uses "*d*" to speak about *a*, say, he says " Φ (*d*)." Then, he said, of *a*, on that occasion, that it Φ 'd; in the appropriate Gricean sense..., he *meant* that *a* Φ 'd. This is true even if *a* is not really the semantic referent of "*d*." If it is not, then *that a Φ 's* is included in what he meant (on that occasion), but not in the meaning of his words (on that occasion)... The speaker's referent is the thing the speaker referred to by the designator, though it may not be the referent of the designator, in his idiolect. In the example above, Jones, the man named by the name, is the semantic referent. Smith is the speaker's referent, the correct answer to the question, "To whom were you referring?"³⁸

In a given idiolect, the semantic referent of a designator (without indexicals) is given by a *general* intention of the speaker to refer to a certain object whenever the designator is used. The speaker's referent is given by a *specific* intention, on a given occasion, to refer to a certain object... My hypothesis is that Donnellan's referential-attributive distinction should be generalized in this light. For the speaker, on a given occasion, may believe that his specific intention coincides with his general intention for one of two reasons. In one case (the "simple" case), his specific intention is simply to refer to the semantic referent: that is, his specific intention *is* simply his general semantic intention. (For example, he uses "Jones" as a name of Jones—elaborate this according to your favorite theory of proper names—and, on this occasion, simply wishes to use "Jones" to refer to Jones.) Alternatively—the "complex" case—he has a specific intention, which is distinct from his general intention, but which he believes, as a matter of fact, to determine the same object as the one determined by his general intention. (For example, he wishes to refer to the man "over there" but believes that he *is* Jones.) In the "simple" case,

the speaker's referent is, *by definition*, the semantic referent. In the "complex" case, they may coincide, if the speaker's belief is correct, but they need not. (The man "over there" may be Smith and not Jones.) To anticipate, my hypothesis will be that Donnellan's "attributive" use is nothing but the "simple" case, specialized to definite descriptions, and that "referential" use is, similarly, the "complex" case.³⁹

以上のクリプキの言葉から明らかのように、話し手の指示と意味上の指示の区別をグライスの話し手の意味と言葉の意味の区別の一つの特殊なケースとみなし、例文を使用して説明する。例えば、遠くからスミス氏を見かけるが、彼をジョーンズ氏と勘違いしている二人の内、一人が "What is Jones doing?" と尋ね、別の人が "Raking the leaves." と答える場合、意味上の指示対象物 (semantic referent) は、言葉の意味によって決められるものであるから、ここではジョーンズ氏となるが、話し手の指示対象物 (speaker's referent) は、話し手が意図する指示対象物 のことで、グライスの話し手の意味に属するものであるから、ここではスミス氏となるとしている。そして、スミス氏をジョーンズ氏と勘違いしているが、Smith is raking the leaves が真であれば、二人の指示対象である特定の人物 (二人の目の前にいる人物、つまりスミス氏) について真実のことを言っている訳で、従って言明は真となるとしている。ところが、続いて、話し手の指示を更に拡大させ、話し手の指示に係わる話し手の意図を二つに分けて、特定の人・物を指示しようとする話し手の一般的な意図 (a general intention of the speaker to refer to a certain object) によって与えられるものが意味上の指示対象物であるとし、特定の人・物を指示しようとする話し手の特定の意図 (a specific intention of the speaker to refer to a certain object) によって与えられるものが話し手の指示対象物であるとする。以上のことから、話し手の特定の意図が同時に一般的な意図である場合、話し手の指示対象物が定義上意味上の指示対象物となるケースを単純なケースと呼び、話し手の特定の意図と一般的な意図は区別できるが、両意図によって与えられる対象物が同一であると話し手が信ずる場合、話し手の指示対象物と意味上の指示対象物が一致することもあるが、必ずしも一致する必要のないケースを複雑なケースと呼び、ドネランの属性的使用と指示的使用を単純なケースと複雑なケースのそれぞれと同一であるとしている。このように、話し手の指示と意味上の指示の区別を、最初は、話し手の意味と言葉の意味の区別として捉え、次に、話し手が指示する際の話し手の特定の意図と一般的な意図の区別として捉え、そしてドネランの指示的使用と属性的使用の区別を話し手の指示と意味上の指示の関係からだけでなく、話し手の特定の意図と一般的な意図の関係からも説明することになる。ただ、そこには曖昧な点が多くあることも事実であろうが。

"Referential and Attributive" (1979) において、サールは、クリプキと同様、ドネラン的区別を話し手の意味と文の意味の区別の一例として説明できるとして批判し、クリプキとは異なる視点から自らの言語行為論を展開していく。まず最初に、"Indirect Speech Act" (1975)⁴⁰ で主張し

た二種類の発語内的行為 (an illocutionary act) に基づき、話し手の第一義的な発語内的行為 (the speaker's primary illocutionary act) と話し手の第二義的な発語内的行為 (the speaker's secondary illocutionary act) に区別し、前者は後者の遂行を通して間接的に遂行されるものとした上で、例を挙げて説明する。例えば、話し手が "Please get off my foot." を要求する為に、"You are standing on my foot." という場合、話し手の発語内的意図には、その文の意味 ("You are standing on my foot") だけでなく、その要求 ("Please get off my foot") も含まれる訳で、従って "Please get off my foot" を相手に要求するという第一義的な発語内的行為は、"You are standing on my foot" を述べるという第二義的な発語内的行為の遂行を通して間接的に遂行されることになり、そこでは二つの言語行為を話し手が遂行することになる。これと同様な形で、話し手による指示行為 (a reference act) も第一義的な指示行為と第二義的な指示行為に区別できるとし、更にドネランの属性的使用にも指示が存在するとした上で、自らの主張を次のように述べていく。

[話し手の第一義的な指示行為・第二義的な指示行為] provided that the speaker's intentions are clear enough so that we can say that he really knew what he meant, then even though the aspect expressed by the expression he utters may not be satisfied by the object he "had in mind" or may not be satisfied by anything, still there must be some aspect (or collection of aspects) such that if nothing satisfies it (or them) the statement cannot be true and if some one thing satisfies it the statement will be true or false depending on whether or not the thing that satisfies it has the property ascribed to it...I propose this the *primary* aspect under which reference is made and contrast it with the *secondary* aspect.

The secondary aspect is any aspect which the speaker expresses in a definite description (or other expression) and which is such that the speaker utters it in an attempt to secure reference to the object which satisfies his primary aspect, but which is not itself intended as part of the truth conditions of the statement he is attempting to make. It follows from these accounts that for every secondary aspect there must be a primary aspect...The secondary aspect does not figure in the truth conditions (except insofar as it includes the primary aspect), the primary aspect does figure in the truth conditions.⁴⁰

[ドネランの指示的使用と属性的使用に対する批判] every "referential" use is an utterance of a definite description which expresses a secondary aspect and every "referential" use has an underlying primary aspect....All of Donnellan's 'referential' cases are simply cases where the speaker uses a definite description that expresses a secondary aspect under which reference is made....

Just as in the indirect speech act cases one performs the primary illocutionary act by way of

performing the literal secondary illocutionary act, so in the referential use of definite descriptions one performs the act of referring to an object as satisfying the primary aspect by way of performing an act of reference expressing a secondary aspect. In both cases one's communication intentions will succeed if one's hearer grasps the primary intention on the basis of hearing the expression which expresses the secondary intention. And in both cases one can succeed in one's primary intent even in certain cases where one's secondary speech act is defective in various ways....

The requirement that every referential statement must have a primary aspect is simply the requirement that every such statement must have a specifiable content. If the utterance of "Smith's murderer is insane" is supposed to constitute the making of a true statement even though the person referred to is not Smith's murderer then the content of the statement must be different from the meaning of the sentence.⁽⁴²⁾

What is going on in the so-called attributive uses of definite descriptions is simply this: the expression uttered expresses the primary aspect under which reference is made. Thus the statement made cannot be true if nothing satisfies that aspect, and if one object satisfies that aspect the statement will be true or false depending on whether or not the object that satisfies that aspect has the property ascribed to it. In the attributive cases in short, speaker meaning and sentence meaning are the same.⁽⁴³⁾

We can now summarize the differences between my account and Donnellan's. On his account there are two distinct uses of definite descriptions only one of which is a use to refer. Definite descriptions thus have an ambiguity, though he allows that it may be a "pragmatic" and not a "semantic" ambiguity. On my account there is no such ambiguity. According to me all of his cases are cases where the definite description is used to refer. The only difference is that in the so-called referential cases the reference is made under a secondary aspect, and in the so-called attributive cases it is made under a primary aspect. Since every statement containing a reference must have a primary aspect, in the "referential" use the speaker may still have referred to something that satisfies the primary aspect even though the expression uttered, which expresses a secondary aspect, is not true of that object and may not be true of anything. Whether or not the utterance of a sentence to make a statement contains a definite description used as a primary aspect or a secondary aspect depends on the intentions of the speaker; that is, it is a matter of the statement he is making and not just of the sentence he utters.⁽⁴⁴⁾

ドネランの言う指示的使用と属性的使用の全ての場合に話し手による指示が存在するとするサールは、上記の引用で明確のように、その指示を第一義的側面のもとで指示がなされる場合 (the

reference is made under a primary aspect) と第二義的側面のもとで指示がなされる場合 (the reference is made under a secondary aspect) に区別し、第二義的側面を確定記述あるいは表現によって直接表わされるものであるが、言明の真偽に関する価値判断に係わるものではないものとして捉え、第一義的側面を確定記述あるいは表現によって表わされるものではないが、言明の真偽に関する価値判断を決めるものとして捉える。しかし第二義的側面が単独で存在することはなく、必ずその基礎を成す第一義的側面を伴うが、第一義的側面が単独で存在することは可能であるとしている。そして、第一義的側面と言明の真偽の関係について、もし何一つ第一義的側面を満足させるものがなければ、言明は真偽いずれでもなくなり、またもし何か一つ第一義的側面を満足させるものがあれば、言明は真偽いずれかになる (述部で述べられる主部についての特性が正しいのかどうかによって決められる) としている。以上のことをもとに、ドネランの指示的使用は、話し手の意味と文の意味が異なる場合のことで、話し手による指示が第二義的側面のもとでなされることである (勿論、その基礎を成す第一義的側面を伴う) のに対して、ドネランの属性的使用は、話し手の意味と文の意味が同一の場合のことで、話し手による指示が第一義的側面のもとでなされることであるとする。更に言うと、前者の指示的使用では、話し手が第二義的指示行為の遂行を通して間接的に第一義的指示行為を遂行するのであり、従って確定記述あるいは表現が直接表わすのは、第二義的側面で、第一義的側面が直接外に表わされることはないとし、聞き手が話し手の第二義的意図を表わす表現を聞いて、話し手の第一義的意図を把握できれば、話し手のコミュニケーションの意図は成功したことになるとするのに対して、後者の属性的使用では、話し手が直接第一義的指示行為を遂行する訳で、従って確定記述あるいは表現自体が第一義的側面を表わすことになるとしている。また、言明の真偽に関しては、指示的使用、属性的使用には共に第一義的側面があり、しかも言明の真偽を決めるのが第一義的側面である為、同一になってしまう (前述の如く、第一義的側面を満足させるものが全くなければ、言明は真偽いずれでもなくなり、満足させるものがあれば、述部との関係で、言明は真偽いずれかになる) が、ただ指示の可能性に関しては、指示的使用においては、第二義的側面を表わす確定記述あるいは表現が第一義的側面を満足させる対象物について誤りであっても、話し手はその対象物を指示したと言えるが、属性的使用においては、第一義的側面を表わす確定記述あるいは表現がその第一義的側面を満足させる対象物について誤りであれば、指示自体が不可能になってしまう。

ここで、ドネランの例文を使用して以上のことを簡単に説明すると、次のようになるであろう。最初に、話し手による指示が第二義的側面のもとでなされる場合 (話し手の意味と文の意味が異なる場合)、目の前にいるジョーンズ氏を指して、話し手が聞き手に “Smith’s murderer is insane” と言う時、話し手は確定記述 “Smith’s murderer” (第二義的側面を表わすもの) を使用して、Jones (第一義的側面を表わすもの、第一義的側面を満足させる対象物) を指示する訳で、第二義的側面のもとでジョーンズ氏に対する指示がなされ、第二義的側面のもとでジョーンズ氏

に関する言明がなされたことになる。その言明の真偽は、第一義的側面 (Jones) によって決められる訳であるから、たとえスミス氏が自殺したのであっても、“Smith’s murderer” (第二義的側面を表わす確定記述) が Jones (第一義的側面を満足させる対象物) に当てはまらず、誤りとなるが、話し手は Jones を指示したことになり、彼の言明は真偽いずれかになり、“is insane” (述部で述べられる主部についての特性) が真であれば、言明も真となり、偽であれば、言明も偽となる (勿論、話し手の指示対象である特定の人物がジョーンズ氏ではなく、別の人物でも構わず、ただ第一義的側面を満足させる対象物がいればいい訳であるが、第一義的側面を満足させる対象物が全くなければ、言明は真偽いずれでもなくなる)。そして、文の意味 “Smith’s murderer is insane” と話し手の意味 “Jones is insane” は異なるが、聞き手は前者を聞いて、後者が理解できれば、話し手が聞き手に伝えようとした意図は、把握されたことになる。次に、話し手による指示が第一義的側面のもとでなされる場合 (話し手の意味と文の意味が同一の場合)、目の前にいず、誰なのか分からないが、スミス氏の殺人者 (殺人者が誰なのか分からないが、スミス氏を殺した人が一人現実に存在するという意味で、ある特定の人物の指示は可能となろう) について、話し手が聞き手に “Smith’s murderer is insane” と言う時、話し手は確定記述 “Smith’s murderer” (第一義的側面を表わすもの) を使用して、Smith’s murderer (第一義的側面を満足させる対象物) を指示する訳で、第一義的側面のもとでスミス氏の殺人者に対する指示がなされ、第一義的側面のもとでスミス氏の殺人者に関する言明がなされたことになる。その言明の真偽は、第一義的側面 (Smith’s murderer) によって決められる訳であるから、スミス氏が自殺したのであれば、Smith’s murderer (第一義的側面を満足させる対象物) が存在しないことになってしまい、“Smith’s murderer” (第一義的側面を表わす確定記述) が当てはめられるべき対象物を失い、誤りとなり、従って第一義的側面を満足させる対象物が全く存在しない為、話し手による指示が不可能になり、話し手の言明が真偽いずれでもなくなってしまう。そして、文の意味 “Smith’s murderer is insane” と話し手の意味 “Smith’s murderer is insane” が同一で、聞き手はそれを聞けば、直ぐに理解でき、話し手の意図も把握できることになる。

以上の説明により、サールの主張はより明確にされたと思うが、次に、彼はクリプキそしてドネランの批判に向かう。基本的には、話し手の指示がなされる第一義的側面と第二義的側面の間に本来の区別が存在することを両者が見抜けなかったことが批判の根拠になっており、クリプキに対しては、話し手の指示と意味上の指示の区別を最初は話し手の意味と言葉の意味の区別として捉えるが、ところが次は話し手が指示する際の話し手の特定の意図と一般的な意図の区別として捉えていることに批判の目が向けられるのである。つまり、指示とは、言語行為のこと (指示行為) であり、意味とは異なるもので、その意味から言うと、話し手が指示すること (話し手の指示) と表現自体が指示すること (意味上の指示) を同次元的に扱うことはできず、むしろ話し手の指示とは分けて、意味上の指示を言葉の意味から捉えていくべきで、その点では、クリプキは

正しかったが、それから飛躍して、意味上の指示を話し手が指示する際の話し手の一般的な意図から捉えていくことに問題があるとし、話し手が使用する表現の言葉の意味が分かり、そしてある特定の使用場面で、その表現を使用して、あるものを指示する話し手の特定の意図があれば十分で、そこに話し手の一般的な意図を持ち込む必要性はないと批判するのである。勿論、話し手の指示を話し手の意図から、意味上の指示を言葉の意味から捉えていこうとするサールの考えの背後には、指示とは、話し手があるものを指示する話し手の指示のことであり、意味とは明らかに区別されるものであるという前提（ストローソンと同様、彼にとっても、指示とは、話し手の指示のことであり、従って話し手は確定記述“Smith's murderer”を使用して、Jones を指示するだけでなく、確定記述“Smith's murderer”を使用して、Smith's murderer も指示する訳で、そこには話し手の指示が前面に出て、意味上の指示が入りこむ余地もないようにも思える。しかし、これで意味上の指示の存在を否定することに直ぐにつながるとは思えず、その点に関する検討の必要性は十分あるが、ここでは一応省くことにする。）があり、その正当性に関する評価をどうすべきかは問題であるが、それは別にして、少なくとも話し手の指示と意味上の指示を共に話し手の指示との関係から（話し手の指示に係わる話し手の意図から）捉えていくことに矛盾があるように思われる。ただ、サールにしても、二つの異なる指示行為、その基となっている二つの異なる発語内的行為が存在するという主張には、大いに疑問が生まれるところであるが。次に、ドネランに対しては、ラッセルとストローソンに対するドネランの批判は、必ずしも的を得ているとは言えず、というのはラッセルとストローソンが扱う対象は、第一義的側面を表わす確定記述あるいは表現（第二義的側面が存在しない場合）で、話し手の意味と文の意味が同一のケースであって、それ以外のケースではないことを正確に把握せずに批判を加えているからであるとしている。その点に関しては、(IV)において、とくにストローソンの例文が分類(1)に属するものであって、(2)ではないことを示したことで明らかであろうが、同意できる点であると言えよう。

ここで、ドネラン、クリプキ、そしてサールのそれぞれの主張を比較してみることにする。確定記述における指示的使用と属性的使用を区別するドネラン、複雑なケース（話し手の指示と意味上の指示が一致することもあるが、必ずしも一致する必要のない場合）と単純なケース（話し手の指示と意味上の指示が定義上同一の場合）を区別するクリプキ、話し手による指示が第二義的側面のもとでなされる場合（話し手の意味と文の意味が異なる場合）と話し手による指示が第一義的側面のもとでなされる場合（話し手の意味と文の意味が同一の場合）を区別するサールという具合に、それぞれが異なる区別の仕方をしているが、その区別の基準を話し手の意図（話し手の指示との関係を含む）であるとしている点で、三者は共通する。勿論、話し手の意図・話し手の指示に対する捉え方は、三者それぞれ異なるが。例えば、ドネランによれば、話し手の指示が存在し、しかも聞き手に話し手の指示対象物を見出せるようにする話し手の意図が存在するのが指示的使用で、そのような話し手の指示が存在せず、従ってそのような話し手の意図が存在し

ないのが属性的使用となり、クリプキによれば、話し手の指示と意味上の指示の共存関係から、また話し手が指示する際の話し手の特定の意図と一般的な意図の関係から見る為、複雑なケースと単純なケース共に話し手の指示が存在し、話し手の意図が存在するが、話し手の指示と意味上の指示の係わり方の相違で、また話し手の特定の意図と一般的な意図の係わり方の相違で複雑なケースと単純なケースに分けられ、そしてサールによれば、意味上の指示ではなく（話し手の指示とは異なる次元にあるものとして、直接扱うことはせず）、あくまでも話し手の指示を第二義的側面のもとでなされる場合と第一義的側面のもとでなされる場合に分け、確定記述あるいは表現をどちらの側面のもとで使用するかは話し手の意図によるとし、従って双方の場合に話し手の指示が存在し、どちらであるかを決めるのが話し手の意図となる。このように、話し手の指示・話し手の意図を一方の場合のみに認めるドネランから、話し手の指示・話し手の意図を双方の場合に認めながら、他の要素の存在も認めるクリプキへ、更に話し手の指示・話し手の意図を双方の場合に認め、しかもそのみを認めるサールに至る過程の中で、話し手の指示・話し手の意図がその重要性を増しながら、次第に前面に出てくる過程が見えてくる。

次に、(IV)で示した分類型との関係で比較してみることにする。“On Referring”におけるストローソンの主張は、主として(1)（とくに、(1-ii)）に関するものであり、また“Reference and Referents”におけるリンスキーの主張は、主として(2)（とくに、(2-ii)）。ストローソンに対する批判には、(1-ii)の内、(d)と(e)を否定する一方で、(f)を肯定するが、(2-ii)の内、(d)を肯定する一方で、(e)と(f)を否定するという具合に、結局(2-ii-d)と(1-ii-f)の肯定という矛盾が内包されているが、彼の使用する例文は、ドネランの例文と同様、本来的には(2-ii)に属するものであると言えよう。）に関するものであり、そして両者を批判するドネランの“Reference and Definite Descriptions”における主張は、彼の指示的使用について言えば、主として(2)（とくに、(2-ii)）に関するものであり、しかも彼の属性的使用について言えば、(1)の修正型（属性的使用が指示自体と全く関係しないとされているからで、ただ強いて言えば、(1-i-c)と(1-ii-f)、とくに(1-ii-f)を対象にしていることになる。）に関するものである。このように、ドネランの主張に見られる(1)と(2)のそれぞれの要素は、前者から指示と言明の真偽の価値判断を切り離した上で、属性的使用と呼ばれ、その反対に、後者にそれら指示と言明の真偽の価値判断を委譲した上で、指示的使用と呼ばれる結果になったが、そうした区別に対して批判を加えるクリプキとサールは、ドネランが扱っている全てのケースを話し手の指示に関するケースであるとし、そこに話し手の意味と文の意味の区別を導入し、それぞれの視点から自らの立場を主張していくことになるのである。そこで、分類型(1)と(2)がどのように適用できるかをみることにする。

ドネランが扱っているケースを全て話し手の指示のケースであるとしているのは、勿論指示的使用と属性的使用の区別そのものを否定し、話し手の指示のケースの中での区別を考えていることになるのであるが、クリプキの“Speaker’s Reference and Semantic Reference”とサールの

“Referential and Attributive” とでは、どこに相違があるのであろうか。説明を簡単にする為に、前述の例 “Smith’s murderer is insane” を使用することにする。クリプキの場合、確定記述 “Smith’s murderer” の意味上の指示対象物が Smith’s murderer であり、また話し手の指示対象物も Smith’s murderer であれば、話し手の指示と意味上の指示が同一となり（両者は定義上同一であると言える）、それが単純なケースと呼ばれ、意味上の指示対象物が Smith’s murderer であるのに対して、話し手の指示対象物が Jones であれば、それが複雑なケースと呼ばれ、この場合、話し手は話し手の指示対象物と意味上の指示対象物が一致する（つまり、Smith’s murderer が Jones である）と信じて言う訳で、一致することもあれば、そうでないこともあり、一致しなくても、話し手が Jones を指示していることは確かであり、従って彼の言明は、その述部が真であれば、真となる。そして、サールの場合、話し手が確定記述 “Smith’s murderer”（第一義的側面を表わすもの）を使用して、Smith’s murderer（第一義的側面を満足させる対象物）を指示すれば、第一義的側面のもとで話し手の指示がなされることになり（第二義的側面は存在せず、確定記述が直接第一義的側面を表わす）、話し手が確定記述 “Smith’s murderer”（第二義的側面を表わすもの）を使用して、Jones（第一義的側面を表わすもの、第一義的側面を満足させる対象物）を指示すれば、第二義的側面のもとで話し手の指示がなされることになり（第一義的側面が第二義的側面を表わす確定記述を通して間接的に表わされる）、いずれの場合でも、第一義的側面によって言明の真偽が決められる。ここで気が付くことは、確定記述に対する意味上の指示対象物と話し手の指示対象物の関係を確定記述に対する第一義的側面を満足させる対象物の関係に変更することにより、話し手が確定記述 “Smith’s murderer” を使用して、Smith’s murderer, Jones, その他の様々な特定の人物を指示できるという具合に、全てを一本化し、単純化したのがサールの特徴であるということである。それはクリプキの意味上の指示対象物を除くことにより（むしろ、確定記述 “Smith’s murderer” の意味上の指示対象物 Smith’s murderer をその言語的意味 “Smith’s murderer” で処理することにより）、そして話し手の指示を二つの側面から捉えることにより可能となるのである。しかし、確定記述 “Smith’s murderer” と Smith’s murderer あるいは Jones の関係に関して、捉え方の相違はあるが、同様の結果に達すると考えることができよう。例えば、単純なケースにおける話し手の指示対象物が Smith’s murderer で、複雑なケースにおける話し手の指示対象物が Jones であるのと同様、第一義的側面のもとで話し手の指示がなされる場合の第一義的側面を満足させる対象物が Smith’s murderer で、第二義的側面のもとで話し手の指示がなされる場合の第一義的側面を満足させる対象物が Jones であるというように。言明の真偽の価値判断に関して言えば、言明の真偽が話し手の指示によって決められるとするクリプキと第一義的側面によって決められるとするサールとでは、同様の結果が出てくるのである。例えば、話し手の指示対象物と意味上の指示対象物が定義上同一の場合・第一義的側面のもとで話し手の指示がなされる場合（話し手の意味と文の意味が同一の場合）、話し手の指

示・第一義的側面 (Smith's murderer) によって言明の真偽が決められる為、もし Smith's murderer が存在すれば、話し手の指示対象物・第一義的側面を満足させる対象物が存在することになり、従って話し手による指示が可能となり、話し手の言明が真偽いずれかになるが、もしスミス氏が自殺したのであれば、Smith's murderer が存在せず、話し手の指示対象物・第一義的側面を満足させる対象物が存在しないことになり、従って話し手による指示が不可能になり、話し手の言明が真偽いずれでもなくなる。そして、話し手の指示対象物と意味上の指示対象物が定義上同一でない場合・第二義的側面のもとで話し手の指示がなされる場合 (話し手の意味と文の意味が区別できる場合)、話し手の指示・第一義的側面 (Jones) によって言明の真偽が決められる為、たとえスミス氏が殺されたのであれ、また自殺したのであれ、いずれにせよ、Jones が存在する限り、話し手の指示対象物・第一義的側面を満足させる対象物が存在することになり、従って話し手による指示が可能となり、話し手の言明が真偽いずれかになる。

以上の説明が正しいとすれば、分類型(1)と(2)がクリプキとサールの分類にも適用できると言えよう。勿論、単純にそのまま適用できるという訳ではないが、少なくとも各主張の比較検討という目的にはそれ程支障はないであろう。ただし、上述に従い、分類型(1)を話し手の指示対象物と意味上の指示対象物が定義上同一の場合・第一義的側面のもとで話し手の指示がなされる場合 (話し手の意味と文の意味が同一の場合) と、(2)を話し手の指示対象物と意味上の指示対象物が定義上同一でない場合・第二義的側面のもとで話し手の指示がなされる場合 (話し手の意味と文の意味が区別できる場合) と読み替え、そして(i)と(iii)を話し手の指示対象物と意味上の指示対象物の関係・第一義的側面を満足させる対象物と第一義的あるいは第二義的側面を表わす確定記述の関係から読み替え、更に多少の読み替えが必要であるが。このような読み替えを行なうことにより、クリプキとサールの主張には、分類型(1-i)(1-ii)(2-i)(2-ii)のそれぞれが含まれていると言えることになるであろう ((1)と(2)のそれぞれにおける(a)-(b)-(c)と(d)-(e)-(f)が適用できるので)。ここでは、クリプキとサールの主張 (クリプキの主張については、厳密に言えば、話し手の指示と意味上の指示の関係のみに焦点を合わせ、話し手の特定の意図と一般的な意図の関係からの検討を除外したのであるが) の類似性をとくに強調してきたが、それは両者に相違点があること、またその意義を否定する意味では決してない。むしろ、話し手の意味と文の意味の区別という同一の基盤に立ちながら、同様の結果を導き出したことに注目したことによるものである。それはともかくとして、代表的な言語行為論者として知られているサールが言語行為論的・語用論的視点からドネラン的区別を批判し、より典型的な形で、より徹底した形で、自らの考えを前面に出したことは確かであろう。そして、ストローソンからサールまでの過程は、ラッセル批判を通して話し手の指示の意義を強調し、結果的に分類型(1)における話し手の指示の意義を明らかにするストローソン、リンスキーを手掛かりにして、分類型(2)における話し手の指示の意義を明らかにし、しかも話し手の意図の重要性を認めながらも、(1)をそれから分離させるドネラン、(1)と(2)共

に話し手の指示・話し手の意図の意義を強調するクリプキ、その話し手の指示・話し手の意図の意義を更に前面に出すサールという具合に、話し手の指示に関する一つの歴史であると言えよう。しかし、話し手の指示に関する議論を更に深めていく為には、聞き手に対する話し手の意図を厳密に分析していく必要がある。勿論、意味上の指示の問題を忘れることはできないであろう。

(VI) 最後 に

本稿では、ドネランの“Reference and Definite Descriptions”を中心に、彼以前のストローソンの“On Referring”とリンスキーの“Reference and Referents”，そして彼以後のクリプキの“Speaker’s Reference and Semantic Reference”とサールの“Referential and Attributive”の関係を言語行為論的・語用論的視点から確定記述と話し手の指示・話し手の意図の関係に対する捉え方の相違に焦点を合わせて検討してきたが、その主目的があくまでも各主張の比較検討であった為、容易に比較できるような特徴的な事柄のみを取り上げ、それぞれの主張における検討すべき多くの事柄を検討せずに残した事柄、また容易に比較検討できるように、ドネランの例文“Smith’s murderer is insane”を再三再四使用し、それぞれの論文で使用されている多くの例文を検討せずに残したことを述べておかなければならない。そして、言語行為論的・語用論的視点からの検討が目的で、その他の様々な視点からの検討を加えなかった為、それぞれの主張に対する妥当性について性急に結論を出すことはできないが、ただ言えるとするれば、言語行為論的・語用論的視点から見られた確定記述と話し手の指示・話し手の意図の関係がサールにおいて典型的な形で（あるいは極端な形で）現われたということである。

(注)

- (1) Bertrand Russell, “On Denoting”, *Mind*, 14 (1905), pp. 479-493. Reprinted in F. Zabeeh, E. D. Klemke and A. Jacobson (eds.), *Readings in Semantics* (University of Illinois Press, Urbana, Illinois, 1974), pp.143-158.
- (2) P. F. Strawson, “On Referring”, *Mind*, 59 (1950), pp. 320-344. Reprinted in F. Zabeeh, E. D. Klemke and A. Jacobson (eds.), *Readings in Semantics* (University of Illinois Press, Urbana, Illinois, 1974), pp. 161-192.
- (3) Keith Donnellan, “Reference and Definite Descriptions”, *Philosophical Review*, 75 (1966), pp. 281-304. Reprinted in A. P. Martinich (ed.), *The Philosophy of Language*, (Oxford University Press, Oxford, 1990), pp. 235-247.
- (4) John R. Searle, “Referential and Attributive”, in John R. Searle, *Expression and Meaning*, (Cambridge University Press, Cambridge, 1979), pp. 137-161.
- (5) Saul Kripke, “Speaker’s Reference and Semantic Reference”, in P. A. French, T. E. Uehling, Jr. and H. K. Wettstein (eds.), *Contemporary Perspectives in the Philosophy of Language*, (University of Minnesota Press, Minneapolis, 1977), pp. 6-27. Reprinted in A. P. Martinich (ed.), *The Philosophy of Language*, (Oxford University Press, Oxford, 1990), pp. 248-267.
- (6) Leonard Linsky, “Reference and Referents”, in C. Caton (ed.), *Philosophy and Ordinary Language*, (University of Illinois Press, Urbana, 1963), pp. 74-89. Reprinted in D. D. Steinberg and L. A. Jakobovits (eds.), *Semantics*, (Cambridge University Press, Cambridge, 1971), pp.

76-85.

- (7) Keith Donnellan, "Speaker Reference, Descriptions and Anaphora", in Peter Cole (ed.), *Syntax and Semantics*, vol. 9, Pragmatics, (Academic Press, San Diego, California, 1978), pp. 47-68.
- (8) P. F. Strawson, *ibid.* p. 169.
- (9) Leonard Linsky, *ibid.* p. 76, p. 79.
- (10) Keith Donnellan, "Reference and Definite Descriptions", pp. 240-241, p. 243.
- (11) Keith Donnellan, "Speaker Reference, Descriptions and Anaphora", p. 47, p. 50.
- (12) Saul Kripke, *ibid.* p. 254, p. 263.
- (13) John R. Searle, "Referential and Attributive".
- (14) Rod Bertolet, *What Is Said*, (Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, the Netherlands, 1990). とくに, 第二, 三, 四章。
- (15) Keith Donnellan, "Reference and Definite Descriptions", p. 237.
- (16) Keith Donnellan, *ibid.* p. 243.
- (17) Keith Donnellan, "Speaker Reference, Descriptions and Anaphora", p. 47.
- (18) Keith Donnellan, *ibid.* p. 50.
- (19) Keith Donnellan, *ibid.* p. 53.
- (20) Keith Donnellan, "Reference and Definite Descriptions", p. 237.
- (21) Keith Donnellan, *ibid.* p. 239.
- (22) Keith Donnellan, *ibid.* pp. 237-238.
- (23) Keith Donnellan, *ibid.* p. 244.
- (24) Keith Donnellan, *ibid.* p. 247, 注12.
- (25) Keith Donnellan, *ibid.* p. 244.
- (26) Keith Donnellan, *ibid.* pp. 245-246.
- (27) P. F. Strawson, *ibid.* p. 169.
- (28) P. F. Strawson, *ibid.* p. 171.
- (29) Keith Donnellan, *ibid.* p. 236.
- (30) Keith Donnellan, *ibid.* p. 239.
- (31) Bertrand Russell, *ibid.* p. 148.
- (32) Gottlob Frege, "On Sense and Reference", in P. T. Geach and M. Black (eds.), *Translations from the Philosophical Writings of Gottlob Frege*, (Basil Blackwell, Oxford, 1952), pp. 56-78.
そして, P. F. Strawson, "On Referring".
- (33) P. F. Strawson, *ibid.* p. 174.
- (34) P. F. Strawson, *ibid.* p. 174.
- (35) P. F. Strawson, *ibid.* p. 175.
- (36) Leonard Linsky, *ibid.* pp. 79-80.
- (37) Leonard Linsky, *ibid.* p. 76.
- (38) Saul Kripke, *ibid.* pp. 255-256.
- (39) Saul Kripke, *ibid.* p. 256.
- (40) John R. Searle, "Indirect Speech Act", in Peter Cole and J. L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics*, vol. 3, Speech Act, (Academic Press, New York, 1975), pp. 59-82.
- (41) John R. Searle, "Referential and Attributive", pp. 145-146.
- (42) John R. Searle, *ibid.* pp. 146-147.
- (43) John R. Searle, *ibid.* p. 148.
- (44) John R. Searle, *ibid.* p. 150.